

## 豚に酒をやらせると、デモハップン・ニューリズムに弱い牛の頓死

戦後間もなくのころ、トンデモハップンという流行語が横行したことがあった。この流行語をもじっていえば、以下の珍談はさしずめ「豚（トン）でも発奮」である。

数年前、アメリカはフロリダ州のある養豚場で、五百頭もの豚がいちどきに酔っぱらうというトンだ珍事が起こった。

その日は夕立のあとに激しい太陽が照りつけ、夕立ですぶ濡れになった飼料のトウモロコシをさながら「煮る」結果となった。その揚げ句、大量のアルコールを発酵させたのである。この酒くさいトウモロコシを腹いっぱい食べた五百頭の豚たちは、文字通り手のつけられないほど泥酔し、あるものはやたらとはしゃぎ回り、あるものはケンカをおっぱじめ、動けなくなつて寝込むもの、千鳥足でむやみと歩き回るものなど、飼い主のビリー氏にとってはトンだ週末になつたのだつた。

一方、酒に酔う豚があれば音楽に目を細める牛ありで、近年、乳牛に音楽を聞かせると乳の出がよくなるとは酪農家間の常識。しかし、例外は必ずあるもので、これも数年前、英国のある牧場での珍事。

某日、その牧場の横をドラムをたたき、ラッパを高らかに鳴らしてパレードの一行が通り

過ぎた。ところがそのあと、牧場主が牛の世話をしようと牛舎に戻つてみると、なんと五頭の牛が急死し、一頭が危篤状態になつていたのである。

で、獣医を呼びにやるやら危篤の牛に水を飲ませるやらの大さわぎとなつたが、どう首をひねつてもわからないのが牛たちの急死の原因。

そうするうち、さつき牧場の横を奇妙な演奏とともに通りすぎて行ったパレードの一行が、相変わらず奇妙な演奏を続けながら引き返して来た。すると、なんとしたことが、こんどはその音でまた二頭の牛がひっくり返つたのだ。

これで、犯人がパレードの音楽であることがわかったが、ただならぬ見幕の牧童たちに取り囲まれたバンドマスターのブライン・ケラー氏も、後日、法廷で語つたように「いやあ、まったく思いもよらない出来事でした。私たちの音楽で牛がトン死(?)するなんて! われわれは、従来の常識を破る新しいリズムのリハーサルをしていたのですがね」

とひたすら平身低頭するばかりだつたと――。

